

夫婦の関係性評価が育児感情を介して 母親アイデンティティに及ぼす影響 —子どもの年齢別による検討—

The Influence of Marital Relationship Evaluation on Parental Identity through
Mediation of Parenting Emotions

石田 有理
ISHIDA Yuri

山下 倫実
YAMASHITA Tomomi

加藤 陽子
KATO Akiko

要 旨

本研究の目的は、幼児期から青年前期の子どもを持つ母親を対象に、夫婦の関係性評価が育児感情を介して親アイデンティティに影響する過程について検討することであった。

2022年3月にクロスマーケティング社に依頼し、3歳以上中学生以下の子ども1名をもつ母親計400名（幼児・小学校低学年・小学校高学年・中学生）を対象に、WEB上でアンケート調査を実施した。

調査内容は、夫婦の関係性評価として夫婦関係満足度、育児感情、親アイデンティティの3つであった。まず、育児感情と親アイデンティティについては、因子分析を行い因子構造を確認した。その後、子どもの発達段階別に最尤法による構造方程式モデリング（SEM）を行った。その結果、どの発達段階においても、結婚満足度は、直接的にも、育児への肯定感を介しても、親アイデンティティの「親役割の受容」「親としての効力感」に正の影響を及ぼしていた。一方、育児への負担感と不安感は、幼児・児童期前期においては、夫婦関係満足度の影響は受けずに、親アイデンティティの「親としての不安」に正の影響、「親役割の受容」「親としての効力感」には負の影響を及ぼしていたが、児童期後期・青年期前期においては、夫婦関係満足度の影響がみられた。また、児童期後期・青年期前期においては、夫婦関係満足度が子どもの育ちへの不安感にも負の影響を及ぼしていた。

以上の結果から、幼児期から児童期前期にかけては、夫婦関係の良好さが育児の肯定感にもつながり、親アイデンティティの獲得を促進すること、また、児童期後期からは、夫婦関係の良好さは育児の負担感や不安感の軽減にもつながり、親アイデンティティを支えることが示唆された。思春期以降は母親と子供の関係性が質的に変化し、育児の悩みが増すものの、夫婦関係に満足していれば、育児を肯定的に捉え親役割の受容にもつながると考えられる。

【問題】

人は親になることによって、青年期に獲得する「個人としてのアイデンティティ」に加えて、「親としてのアイデンティティ」を発達させる。岡本（1996）は、母親を対象に、女性のアイデンティティの様態について研究した結果、「個人としてのアイデンティティ」と「親アイデンティティ」を両立していると、家庭生活への満足度が高く、より家族に対して積極的に関与することにつながっていることを明らかにした。また、夫からの理解や受容を認知しやすいという傾向もみられた。したがって、母親の発達過程において、「親アイデンティティ」の獲得は重要であり、家庭生活への関与や夫との関係とも関連するといえる。

夫婦関係の良否が、親の育児ストレスや養育態度と関連があることが様々な研究で示されてきた。佐藤（2012）は、育児初期に夫婦関係への評価が高い母親は低い母親にくらべて、親役割を積極的にあるいは肯定的に受容していることを示している。また、堀口（2006）によると、夫婦間に不満や葛藤があると、きびしい非受容的な養育態度になる傾向がみられることが示されている。育児にストレスを抱える母親（妻）にとって、父親（夫）のサポートは不可欠であり（e.g., 尾形・宮下, 2003）、子育て中の夫婦関係は育児の基盤となるものであるといえる。平山（2002）は、妻が夫へのケアと夫からのケアを同等だと感じているほど、家族内ケアに対する否定感が弱まることを示しており、夫婦におけるケアが子どもに対してのケアと関連していることが伺える。これらのことから、夫婦関係が基盤となり、子育ての中で感じる育児への思いやストレスなどと関連しながら、母親の親アイデンティティが獲得されていくと考えられる。なかでも肯定的な親アイデンティティの獲得には夫婦の関係性の良好さが重要となるだろう。

ただし、従来の研究の多くは、乳幼児期の子どもを持つ親を調査対象としており、育児のごく初期における夫婦関係と子育てとの関連しか検討されていない。しかし、子どもの成長にともなって育児の内容は変化していき、連動して育児感情も変化すると考えられる。就学前の子どもをもつ母親を対象にした先行研究（井梅, 2017）においてさえ、子どもの年齢によって、育児感情の様相が異なることが示されている。したがって、幼児期から青年期にかけて、子どもの発達段階別に、子育ての基盤となる夫婦関係が育児感情や親アイデンティティにどのような影響を及ぼしているのか検討する必要がある。

育児に対する不安感や負担感については、母親の育児不安に焦点をあてた研究から検討されてきており（e.g., 牧野, 1981, 住田, 1999）、その後、育児に対する感情として不安感や負担感と同時に、肯定感、子どもの育ちへの不安感についても取り上げられるようになった（e.g., 小淵・高橋, 2002）。先行研究において、情緒的なソーシャル・サポートの量が多いと、母親が感じる育児感情のうち、育児不安が低く育児肯定感が高いこと（荒牧・田村, 2003）、夫からのサポートが高いと抑うつ傾向が低いこと（小林, 2009）、などが示されている。したがって、夫婦関係が良好であり、夫からサポートを十分受けていると感じることができれば、育児に対して肯定的な感情を持ちやすいと考えられる。親アイデンティティに関しては、父親（夫）が行う育児行動よりも、育児に携わる母親（母）に対する支援が、母親の肯定的なアイデンティティ獲得につながることが示されている（加藤・山下・石田・布施, 2019）。また、熊野（2017）は、乳幼児を持つ親の育児感情と自分の役割配分、幸福感との関連について検討しており、母親において、育児に対する肯定感が高いと親としての自分が役割配分として大きくなることを示している。母親にとっては、「個としてのアイデンティティ」と「親アイデンティティ」を両立することが重要であること（岡本, 1996）とあわせて考えると、夫婦関係とともに、育児感情が

親アイデンティティの獲得にも影響することが予測される。

したがって、本研究では、育児期を通して、夫婦関係が直接的に親アイデンティティの獲得に影響すると同時に、夫婦関係が育児感情を介して親アイデンティティの獲得に影響すると考えた。Figure1にモデル図を示した。本研究では、母親が夫婦関係をどのように評価しているかを測定するために、夫婦関係満足度（諸井，1996）を使用した。諸井（1996）は「夫婦が互いに理解し、信頼しあっていることを夫婦満足としてとらえ、夫婦の関係全体の良さ」と夫婦関係満足を定義しており、本研究でもこの定義を用いる。また、育児感情は、育児をする中で感じる負担感や不安感、肯定感のことである。育児経験のなかで感じる感情を通して、個としてのアイデンティティに加えて、自身の親としての役割を理解したうえで受容し肯定的に評価する親アイデンティティが獲得されていくと予想される。以上のことをふまえ、本研究では、幼児期から青年期前期の子どもを持つ母親対象に、夫婦の関係性評価が育児感情を介して親アイデンティティに影響する過程について検討することを目的とする。

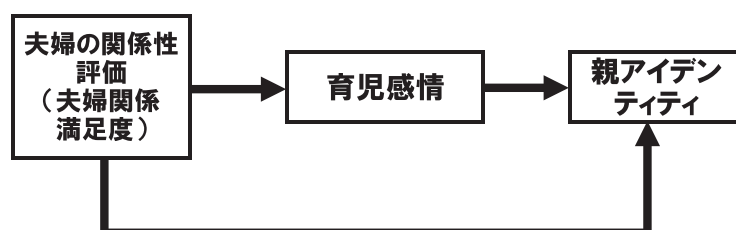


Figure 1. 本研究のモデル図

【方法】

調査協力者

2022年3月にクロスマーケティング社に依頼し、3歳以上中学生以下の子ども1名をもつ母親を対象に、WEB上でのアンケート調査を実施した。分析対象は回答漏れがなかった母親400名（幼児・小学校低学年・小学校高学年・中学生、各100名）であり、各グループの母親の平均年齢は、幼児36.43歳（SD = 5.56）、小学校低学年41.79歳（SD = 5.04）、小学校高学年44.54歳（SD = 4.67）、中学生46.35歳（SD = 4.55）であった。なお、本調査の実施については、本学の倫理審査委員会の承認を受けている（番号：2021-030）。

質問項目

質問を開始する前に、調査協力者のプライベートな情報について尋ねる項目が多数存在するため、①回答は全て統計的に処理され、個人が特定されること、情報が漏洩することはないこと、②個々の質問への回答は任意であり、回答しにくい項目については、回答せず次の質問に移ってよいことを教示した。また、WEB調査の最初のページに調査協力者が最後まで回答することをもって、本研究への参加の「同意」とすることについて明記した。

1) 夫婦関係満足度

諸井（1996）の「夫婦関係満足度尺度」を用いて、母親の夫婦関係の満足度を評価した。計6項目について、「1. ほとんどあてはまらない」から「4. かなりあてはまる」までの4件法で回答を求めた。

($\alpha = .966$)。

2) 育児感情尺度

荒牧 (2008) の「育児感情尺度」を用いて、母親の育児に対する感情を測定した。計21項目について「1. 全くない」から「4. よくある」までの4件法で回答を求めた。就学前の子どもを持つ親に尋ねることを前提としている尺度のため、小学生・中学生の子どもを持つ親にも回答できるように、「入園後、自分の子どもがほかの子どもに遅れないでついていけるか不安になる」という項目については、「入学・入園後」に文言を修正した。

3) 親アイデンティティ

母親の「親としてのアイデンティティ」を評価するために、山口 (2010) の親アイデンティティ尺度を参考に、18項目を選定して用いた。「1. ぜんぜんそう思わない」から「5. まったくその通りである」までの5件法で回答を求めた。項目の詳細は結果で示す。

なお、上記の項目のほかに、家庭環境に関する項目として、①年齢、②配偶者の年齢、③職業、④子どもの年齢、⑤結婚期間、⑦収入についても尋ねた。

統計解析

統計ソフトは、IBM SPSS Statistics Virsion26 for JapanとSPSS Amos 26を用いた。親アイデンティティと育児感情の因子構造を確認するために因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。また、夫婦関係満足度が育児感情および親アイデンティティに及ぼす影響を検討するため、子どもの発達段階別に最尤法による構造方程式モデリング（SEM）による分析を実施した。

【結果】

1. 調査協力者の属性

まず、職業については、専業主婦が45.3%であり、約半数が無職であった。有職者の割合については、会社員が14%、派遣・契約社員・嘱託が2.3%、パート・アルバイトが31.3%、自営業が2.8%、内職・在宅ワークが2.8%、その他1.8%となっていた。次に、世帯収入は400万～600万未満が22.8%と最も多く、次いで600万～800万円未満が16.5%、800万～1000万未満が11.8%、と200万～400万未満と1000万以上がともに11.3%であった（未回答：24.5%）。厚生労働省（2022）の国民生活基礎調査によれば、30代の1世帯あたりの平均所得額は627万2千円、40代では728万5千円となっており、平均的な世帯収入の調査協力者であるといえる。最後に、結婚期間は平均151.57ヶ月（SD = 60.24）であった。

2. 親アイデンティティの因子分析

まず、母親の「親としてのアイデンティティ」の構造について検討するために、因子分析を実施した。本研究では、子どもの年齢区分別に夫婦関係満足度および育児感情が親アイデンティティにどのように影響を与えるかについて検討することを目的としているため、結果の解釈において全ての母親の親アイデンティティの項目を統一することが望ましいと考えた。そこで、母親の回答した親アイデンティティ尺度18項目について、因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。固有値1.0以上の基準で3因子を抽出した（Table 1）。なお、因子負荷量が低い、もしくはダブルローディングしていた4項目「1. 親として順調にやっているといると思う」、「5. 子育てよりも自分の生きがいを充実させることの方が重要である」、「10. 親としてやっているといる自信がある」、「15. 親としてかかわっている時が一番自分らしいと思う」については除外した。

Table 1. 親アイデンティティの因子分析結果

	因子		
	I	II	III
I. 親としての不安 ($\alpha=.899$)			
8. 親としてどうあるべきなのかまったくわからない	.842	.033	-.044
9. 子育てに疲れてしまい、どうしていいのかさっぱりわからない	.783	-.167	.152
16. 自分は親として不適格であるような気がする	.778	.157	-.273
17. 親として自分に何か意味のあることができるとは思えない	.753	.092	-.127
3. この先、子育てをどう進めて良いのか見当もつかない	.722	-.128	.101
7. 人からダメな親だと思われるのではないかと不安である	.705	.037	-.002
2. 「親である私」は、本当の私ではないような気がする	.634	-.167	.265
13. 気持ちの上ではまだ親になりきっていない気がする	.586	.132	-.114
II. 親役割の受容 ($\alpha=.793$)			
12. 親になって良かったと思う	-.060	.783	-.063
11. 親としての生き方は様々なので、自分に合ったものを積極的に選んでいきたい	.070	.685	.015
14. 子育てを楽しんでいる	-.092	.668	.213
6. 子育てについて自分なりの考えを持っている	.125	.470	.305
III. 親としての効力感 ($\alpha=.916$)			
4. 子どもにとって良い親であると思う	.023	.237	.686
18. 親として一人前である	-.047	-.002	.676
因子間相関			
I		-.426	-.249
II			.406

第1因子は「親としてどうあるべきかまったくわからない」「この先、子育てをどう進めてよいのか見当もつかない」などの8項目から構成されていた。これらの項目は、親としての不安感や自信のなさを示す因子であり、「親としての不安」因子とした ($\alpha=.899$)。第2因子は「親になってよかったと思う」「子育てを楽しんでいる」などの4項目から構成されていた。親としての役割を受け入れていることを示す因子であり、「親役割の受容」因子とした ($\alpha=.793$)。第3因子は「子どもにとって良い親であると思う」「親として一人前である」の2項目から構成されていた。親として自信をもち手ごたえを感じていることを示す項目で構成されているため「親としての効力感」因子とした ($\alpha=.916$)。

3. 育児感情の因子分析

次に、母親の育児感情の構造について検討するために、育児感情尺度21項目への回答への回答に対して因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。結果をTable 2に示す。

第1因子は、「子どもをうまく育てていけるか不安になる」「子どもに時間を取られて、自分のやりたいことができず、いらいらする」など13項目から構成されていた。これらの項目は、育児に対して不安や負担を感じる因子であり「育児への不安感と負担感」因子とした ($\alpha=.941$)。第2因子は、「他の子どもにはできて、自分の子どもにはできないことが多いと感じる」「同年齢の子どもと比べて、自分の子どもは発達が遅れているのではないかと思う」など4項目から構成されていた。これらの項目は、子どもの育ちに対する遅れを懸念する因子であり「育ちへの不安感」因子とした ($\alpha=.889$)。第3因子は、「子どもを育てることは、有意義で素晴らしいことだと思う」「子どもの成長が楽しみだと感じる」など4項目から構成されていた。これらの項目は育児に対する肯定的な感情を示す因子であり「育児への肯定感」因子とした ($\alpha=.893$)。

Table 2. 育児感情の因子分析結果

	因子		
	I	II	III
I. 育児への不安感と負担感 ($\alpha=.941$)			
11. 子どもをうまく育てていけるか不安になる	.840	.043	.030
10. 育児のことでしたらよいかわからなくなる	.824	.049	-.009
3. 子どもに時間を取られて、自分のやりたいことができず、いらいらする	.812	-.112	.003
4. 子どもを育てるために我慢ばかりしている	.809	-.135	-.029
12. 自分の育て方でよいのかどうか不安になる	.795	.091	.105
13. 子どもにうまく対応できていないと感ずることがある	.782	.062	.078
1. 毎日、育児の繰り返しばかりで、社会とのきずなが切れてしまうように感じる	.723	-.057	.067
7. 子どもが自分の言うことをきかないので、いらいらする	.692	.051	.063
8. 子どもがわずらわしくていらいらする	.688	.089	-.093
5. 子どもが汚したり、散らかしたりするのでいやになる	.666	.019	-.020
9. 子どものことを考えるのが面倒になる	.646	.044	-.194
6. 自分の子どもでも、かわいくないと感ずることがある	.604	.088	-.161
2. 自分ひとりだけで子育てしているような気がする	.561	.021	.082
II. 育ちへの不安感 ($\alpha=.889$)			
15. 他の子どもにはできて、自分の子どもにはできないことが多いと感じる	.013	.879	-.002
16. 同年齢の子どもと比べて、自分の子どもは幼いと感じる	-.033	.840	.004
17. ほかの子どもと比べて、自分の子どもの発達が遅れているのではないかと思う	-.005	.838	-.043
14. 入学・入園後、自分の子どもがほかの子どもに遅れないでついていけるか不安にな	.192	.607	.067
III. 育児への肯定感 ($\alpha=.893$)			
19. 子どもを育てることは、有意義で素晴らしいことだと思う	.041	-.012	.922
21. 子どもを育てることによって、自分も成長しているのだと感じる	.054	-.029	.802
20. 子どもの成長が楽しみだと感じる	.091	-.003	.797
18. 子どもを育てるのは楽しいと思う	-.152	.056	.782
因子間相関			
I		.678	-.257
II			-.187

4. 夫婦関係満足度、親アイデンティティおよび育児感情との相関関係

子どもの年齢区分ごとに、夫婦関係満足度尺度、親アイデンティティ尺度および育児感情尺度の各下位尺度得点を算出した。Table 3に平均得点を示す。相関分析の結果についてはTable4、5に示す。Table 4の左下部には幼児、右上部には小学校低学年、Table 5の左下部には小学校高学年、右上部には中学生の結果を示している。

全ての年齢区分で、「夫婦関係満足度」と親アイデンティティの「親役割の受容」「親としての効力感」と有意な正の相関が、育児感情の「育児への肯定感」と有意な正の相関がみられた。児童期後期・青年期前期においては、「夫婦関係満足度」と育児感情の「育児への負担感と不安感」「育ちへの不安感」と有意な負の相関がみられた。また、全ての年齢区分で、親アイデンティティの「親としての不安」は、育児感情の「育児への負担感と不安感」「育ちへの不安感」と有意な正の相関がみられた。幼児期以外の年齢区分では、「育児への肯定感」と有意な負の相関がみられた。また、「親役割の受容」については、全ての年齢区分で、「育児への負担感と不安感」「育ちへの不安感」と有意な正の相関が、「育児への肯定感」と有意な負の相関がみられた。さらに、「親としての効力感」は、全ての年齢区分で、「育児の負担感と不安感」と有意な負の相関がみられ、児童期前期以外の年齢区分で、「育ちへの不安」と有意な負の相関が、「育児への肯定感」と有意な正の相関がみられた。

全ての年齢区分で、「夫婦関係満足度」と親アイデンティティの「親役割の受容」「親としての効力感」

Table 3. 夫婦関係満足度, 親アイデンティティ, 育児感情の平均値 (SD)

	夫婦関係 満足度	親アイデンティティ			育児感情		
		親としての 不安	親役割の受容	親としての 効力感	育児への負担 感と不安感	育ちへの不安	育児への 肯定感
幼児	2.78 (0.78)	2.92 (0.78)	3.25 (0.65)	2.65 (0.87)	2.62 (0.67)	2.41 (0.89)	3.08 (0.70)
小学低	2.82 (0.84)	2.82 (0.90)	3.51 (0.69)	2.94 (0.94)	2.34 (0.74)	2.18 (0.86)	3.21 (0.72)
小学高	2.56 (0.89)	2.63 (0.80)	3.34 (0.70)	2.84 (0.79)	2.40 (0.73)	2.36 (0.90)	3.04 (0.80)
中学	2.53 (0.91)	2.92 (0.91)	3.30 (0.73)	2.82 (0.92)	2.41 (0.70)	2.27 (0.78)	3.07 (0.71)

Table 4. 夫婦関係満足度, 親アイデンティティ, 育児感情の相関係数 (左下部: 幼児・右上部: 小学低)

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
親アイデン ティティ	①夫婦関係満足度		-.099	.422 **	.306 **	-.136	-.114	.212 *
	②親としての不安	-.028		-.222 *	-.101	.657 **	.367 **	-.467 **
	③親役割の受容	.380 **	-.303 **		.835 **	-.351 **	-.218 *	.425 **
	④親としての効力感	.270 **	-.237 *	.679 **		-.262 **	-.112	.110
育児感情	⑤育児への負担感と不安感	-.105	.752 **	-.404 **	-.294 **		.640 **	-.140
	⑥育ちへの不安	-.087	.559 **	-.275 **	-.239 *	.719 **		-.022
	⑦育児への肯定感	.219 *	-.113	.580 **	.206 *	-.042	-.011	

*p<.05, **p<.01

Table 5. 夫婦関係満足度, 親アイデンティティ, 育児感情の相関係数 (左下部: 小学高・右上部: 中学)

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
親アイデン ティティ	①夫婦関係満足度		-.223 *	.417 **	.429 **	-.287 **	-.311 **	.215 *
	②親としての不安	-.194		-.385 **	-.212 *	.589 **	.412 **	-.563 **
	③親役割の受容	.499 **	-.623 **		.792 **	-.463 **	-.347 **	.503 **
	④親としての効力感	.437 **	-.524 **	.792 **		-.252 *	-.199 *	.224 *
育児感情	⑤育児への負担感と不安感	-.256 *	.726 **	-.595 **	-.477 **		.612 **	-.425 **
	⑥育ちへの不安	-.235 *	.606 **	-.461 **	-.447 **	.655 **		-.299 **
	⑦育児への肯定感	.284 *	-.442 **	.618 **	.414 **	-.288 **	-.292 **	

*p<.05, **p<.01

と有意な正の相関が, 育児感情の「育児への肯定感」と有意な正の相関がみられた。児童期後期・青年期前期においては, 「夫婦関係満足度」と育児感情の「育児への負担感と不安感」「育ちへの不安感」と有意な負の相関がみられた。また, 全ての年齢区分で, 親アイデンティティの「親としての不安」は, 育児感情の「育児への負担感と不安感」「育ちへの不安感」と有意な正の相関がみられた。幼児期以外の年齢区分では, 「育児への肯定感」と有意な負の相関がみられた。また, 「親役割の受容」については, 全ての年齢区分で, 「育児への負担感と不安感」「育ちへの不安感」と有意な正の相関が, 「育児への肯定感」と有意な負の相関がみられた。さらに, 「親としての効力感」は, 全ての年齢区分で, 「育児の負担感と不安感」と有意な負の相関がみられ, 児童期前期以外の年齢区分で, 「育ちへの不安」と有意な負の相関が, 「育児への肯定感」と有意な正の相関がみられた。

5. 夫婦関係満足度が育児感情および親アイデンティティに及ぼす影響の検討

夫婦関係満足度が育児感情を介して親アイデンティティに及ぼす影響過程について仮説モデルの検討を行うため、SPSS Amos26を用いて、子どもの年齢区分別に最尤法による構造方程式モデリング(SEM)による分析を実施した。具体的には、夫婦関係満足度から育児感情(負担と不安/育ちへの不安/肯定感)にパスを引いた。また、育児感情(負担と不安/育ちへの不安/肯定感)から親アイデンティティ(親としての不安/親役割受容/親効力感)にパスを引いた。加えて、夫婦関係満足度から直接、親アイデンティティ(親としての不安/親役割受容/親効力感)にパスを引いた。

まず、幼児期の子どもを持つ母親の結果を示す。有意ではないパスを削除した結果、Figure 2に示すモデルが得られた。モデルの適合度指標は、 $\chi^2(7) = 7.64$, $p = .365$, GFI = .975, AGFI = .924, CFI = .997, RMSEA = .030であった。Hu & Bentler (1999) の基準に基づき、Figure 2のモデルの適合度は許容範囲内であると判断した。

次に、小学校低学年の子どもを持つ母親の結果を示す。有意ではないパスを削除した結果、Figure 3に示すモデルが得られた。モデルの適合度指標は、 $\chi^2(5) = 6.11$, $p = .296$, GFI = .980, AGFI = .917, CFI = .996, RMSEA = .047であった。したがって、Hu & Bentler (1999) の基準に基づき、Figure 3のモデルの適合度は許容範囲内であると判断した。

さらに、小学校高学年の子どもを持つ母親の結果を示す。有意ではないパスを削除した結果、Figure 4に示すモデルが得られた。モデルの適合度指標は、 $\chi^2(3) = 4.39$, $p = .222$, GFI = .988, AGFI = .885, CFI = .996, RMSEA = .068であった。したがって、Hu & Bentler (1999) の基準に基づき、Figure 4のモデルの適合度は許容範囲内であると判断した。

最後に、中学生の子どもを持つ母親の結果を示す。有意でないパスを削除した結果、Figure 5に示すモデルが得られた。モデルの適合度指標は、 $\chi^2(8) = 4.33$, $p = .826$, GFI = .988, AGFI = .958, CFI = 1.000, RMSEA = .000であった。したがって、Hu & Bentler (1999) の基準に基づき、Figure 5のモデルの適合度は許容範囲内であると判断した。

分析の結果、全ての時期において、夫婦関係満足度が直接的に親アイデンティティの親役割の受容や親としての効力感に正の影響を及ぼしていた。また、夫婦関係満足度が育児への肯定感を介して親役割の受容へと正の影響を及ぼしており、児童期前期以降は親としての不安に負の影響を及ぼしていた。幼児期と児童期前期においては、育児への負担感と不安感は夫婦関係満足度の影響はうけないが、親とし

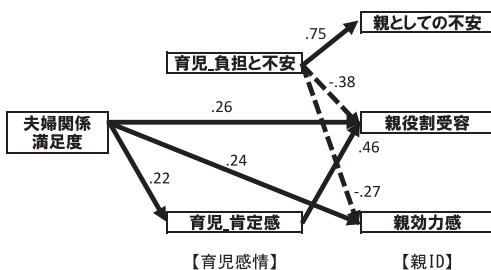


Figure 2. 夫婦関係満足度および育児感情が親アイデンティティに及ぼす影響 (幼児)

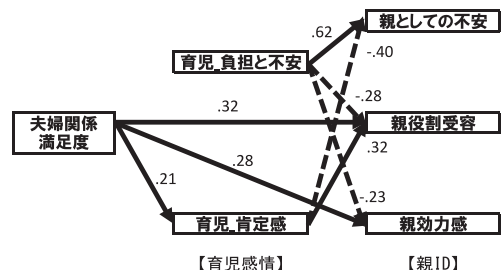


Figure 3. 夫婦関係満足度および育児感情が親アイデンティティに及ぼす影響 (小学低)

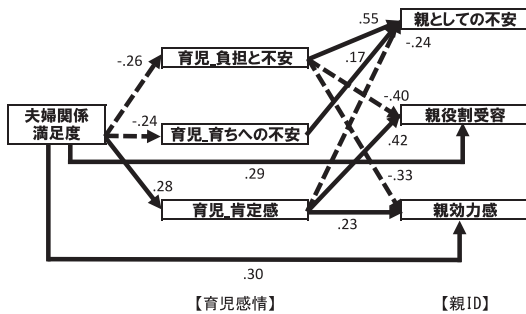


Figure 4. 夫婦関係満足度および育児感情が親アイデンティティに及ぼす影響（小学高）

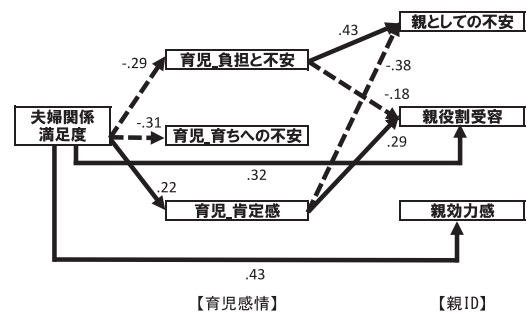


Figure 5. 夫婦関係満足度および育児感情が親アイデンティティに及ぼす影響（中学）

ての不安に正の影響、親役割の受容や親としての効力感には負の影響を及ぼしていた。一方、児童期後期と青年期前期では、夫婦関係満足度が育児への負担感と不安感を介して親としての不安に正の影響、親役割の受容に負の影響を及ぼしていた。加えて、児童期後期においては、親としての効力感に対して負の影響を及ぼしていた。また、児童期後期と青年期前期では、夫婦関係満足度が育ちへの不安に負の影響を及ぼしており、児童期後期においてのみ、さらに育ちへの不安が親としての不安に負の影響を及ぼしていた。

【考察】

本研究の目的は、幼児期から青年前期の子どもをもつ母親を対象に、子どもの年齢区分ごとに、夫婦の関係性評価が育児感情を介して親アイデンティティに影響する過程を検討することであった。

まず、分析に先立ち、母親の親アイデンティティの構造を検討したところ、「親としての不安」「親役割の受容」「親としての効力感」という3因子構造が得られた。3歳児未満の子どもをもつ母親を対象とした調査（山下・加藤・石田, 2016）では、「親としての自信のなさ」「親としての効力感」「親役割の受容」「親役割からの逃避」の4因子が抽出されたが、本研究の対象者は子どもの年齢が3歳以上から中学生まで幅広く、ネガティブなアイデンティティの側面は「親としての不安」として包括されたと考えられる。次に、母親の育児感情の構造を検討したところ、「育児への負担感と不安感」「育ちへの不安」「育児への肯定感」の3因子構造が得られた。先行研究においては、「育児への負担感」と「育児への不安感」は別々の因子として抽出されていたが（荒牧, 2008）、本研究では「育児への負担感と不安感」として1つの因子にまとまっていた。先行研究においては、幼児期の子どもをもつ母親を対象としており、育児の負担が物理的にも大きい時期であるが、子どもの成長にともない物理的な負担は減っていくといえる。したがって、幼児期から中学生までの子どもを持つ母親を対象としている本研究においては、負担感と不安感は1つの因子としてまとまったと考えられる。

次に、夫婦関係満足度が育児感情を介して親アイデンティティに及ぼす影響を検討するため、子どもの発達段階別に構造方程式モデリング（SEM）による分析を実施した。その結果、発達段階によって、影響関係が同じように見いだされる部分と、異なる部分があることが示された。まず、夫婦関係満足度

は、親役割の受容と親としての効力感というポジティブな親アイデンティティに直接的に影響していた。どの発達段階においても、夫婦関係は親アイデンティティ獲得の基盤となり、夫婦関係が良好であればポジティブな親アイデンティティの獲得を促進すると考えられる。また、夫婦関係満足度が、育児への肯定感を介して、親役割の受容に正の影響、親としての不安に負の影響を及ぼすことが示された。良好な夫婦関係が、育児への肯定感を高め、親としての不安を低減し、親役割を受容しやすくすることが予測される。これらの結果は全ての発達段階でみられており、一貫して、良好な夫婦関係は育児への肯定感を高め、親アイデンティティの獲得を促進するといえる。

一方で、育児への負担と不安感は、幼児期と児童期前期においては、夫婦関係満足度の影響を受けておらず、親役割の受容と親としての効力感に対して負の影響を、親としての不安には正の影響を及ぼしていた。これに対して、児童期後期と青年期前期においては、夫婦関係満足度が、育児への負担と不安感を介して親アイデンティティに対して同様の影響を及ぼしていた。すなわち、子どもが幼児期・児童期前期の間は、夫婦関係の良否は否定的な育児感情に影響しないが、児童期後期以降は、夫婦関係が良好であれば否定的な育児感情が軽減され、親役割の受容や親としての効力感につながると考えられる。育児の負担が物理的にも大きく、子どもが著しく発達する時期でもある幼児期・児童期前期においては、育児の負担・不安感には、母親自身の子育てや子どもの発達の影響が強いことが予測される。一方、親になってからの意識の変化に関する質的な検討（石田・加藤・山下・布施, 2021）において、母親は父親に、具体的な育児行動よりも親として主体的に子どもと遊ぶことを求めており、父親の子どもへの意識に変化を感じることで夫婦関係が安定することが示唆されている。したがって、育児への肯定感に関しては、パートナーとの関係に満足していることで、子どもへの関わり方や成長の様子などを共有することができ、そのことを通じて育児をポジティブに捉えることができた結果、親役割の肯定的受容につながる可能性がうかがえる。

落合・佐藤（1996）は、思春期以降の母子の関係性は、幼少期までの保護的な養育から質的に変化することを指摘している。すなわち、子どもが児童期後期に入ると、母親は子育ての質的变化への対応を求められ、育児の悩みも増す場合があるといえる。本研究では、特に児童期後期において、夫婦関係満足度が子どもの育ちへの不安感を介して不安定な親アイデンティティに影響を及ぼすことが示された。したがって、変化が大きい思春期以降においても、夫婦関係に満足していれば、育児への否定的な感情が軽減され、親役割の肯定的な受容につながると考えられる。住田（1999）は、育児に対する負担感や不安感は育児に携わる限りある程度生じるものであるが、肯定的感情が基底となっている限りにおいては、育児不安による混乱は生じないことを指摘している。本研究においても、発達段階を問わず、夫婦関係が、育児に対する肯定感を介して、ポジティブな親アイデンティティの獲得に影響を及ぼすことが示されている。これらをあわせて考えると、良好な夫婦関係を基盤として、母親が育児に対して安定した肯定感を感じることができていれば、子どもの成長に伴ってあらわれる様々な子育ての悩みや不安に対して混乱することなく、安定した親アイデンティティを保てると推察される。

最後に、本研究の問題点と今後の展望について述べる。まず、幼児期から思春期までの育児感情を、育児感情尺度（荒牧, 2008）を用いて測定したが、この尺度は幼児期～児童期前期の子どもをもつ親を対象にした調査において用いられているものである（e.g., 吉田・岡本, 2011）。したがって、子どもが児童期後期以降の育児感情はそれ以前と質が異なり、育児感情尺度では正しく測定できていない可能性がある。この点は本研究の限界である。親が児童期後期以降の子どもの養育や子どもとの関係性に対して持つ感情を検討することは、子どもが自立していく過程における親アイデンティティの確立や適応を考

える際に必要なことだと考えられるが、十分な検討がなされているとはいえない。したがって、今後の課題として、子どもが児童期後期以降に親が感じる不安感や負担感、または肯定感がどのようなものかについて尺度作成も含めて検討する必要がある。また、本研究では、発達段階別に、夫婦の関係性評価が育児感情を介して親アイデンティティに及ぼす影響を検討したが、あくまで横断的な検討であり、夫婦関係の変化や子どもの発達のプロセスの影響などは考慮できていない。特に、子育ての過程において、子どもの発達には個人差があり、発達の遅れや不登校などの問題が生じることもある。したがって、今後は、子どもの発達という指標からも、育児感情の差異や夫婦関係への影響などを検討する必要があると考えられる。また、育児期を通した縦断的な研究により、夫婦関係が基盤となって、子育てに対して肯定的な感情を維持し、安定した親アイデンティティを獲得していくというプロセスをより明確に実証していくことで、育児期における継続的な子育て支援への示唆を得ることが課題となる。

引用文献

- 荒牧美佐子 (2008). 幼稚園の入園前後における母親の育児感情の変化 家庭教育研究所紀要第6部門, 30, 139-149.
- 荒牧美佐子・田村毅 (2003). 育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャル・サポートの規定要因: 幼稚園児を持つ母親の場合 東京学芸大学紀要, 55, 83-93.
- 平山順子 (2002). 夫婦関係の研究が示す「新しい子育て」への提言 家族心理学年報, 20, 63-76.
- 堀口美智子 (2006). 乳幼児をもつ親の夫婦関係と養育態度 家族社会学研究, 17, 68-78.
- Hu, L.T. & Bentler, P.M. (1999). Cutoff Criteria for Fit Indexes in Covariance Structure Analysis: Conventional Criteria versus New Alternatives. Structural Equation Modeling A Multidisciplinary Journal, 6, 1-55.
- 石田有理・加藤陽子・山下倫実・布施晴美 (2021). 親になることによる夫婦関係の変化—質的検討を通して— 日本発達心理学会第32回大会.
- 井梅由美子 (2017). 乳幼児を持つ母親の育児不安と子育て支援資源の利用について— 東京未来大学研究紀要, 12, 1-12.
- 加藤陽子・山下倫実・石田有理・布施晴美 (2019). 夫婦における父親の育児行動評価と親アイデンティティ及び関係効力性との関連 十文字学園女子大学紀要, 50, 19-31.
- 熊野道子 (2017). 乳幼児をもつ親の育児感情と自分の役割配分と幸福感的関連 健康心理学研究, 29, 45-52.
- 厚生労働省 (2022). 令和元年国民生活基礎調査
(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/index.html>) (2023年9月15日)
- 小林佐和子 (2009). 乳児をもつ母親の抑うつ傾向と夫からのサポートおよびストレスへのコントロール可能性との感染 発達心理学研究, 20, 189-197.
- 牧野カツコ (1981). 育児における〈不安〉について 家庭教育研究所紀要, 2, 41-51.
- 小淵恵・高橋道子 (2002). 幼児を持つ夫婦の生活満足度—夫婦間相互サポートを含むソーシャル・サポートとの関連から— 東京学芸大学紀要第1部門, 53, 47-56.
- 諸井克英 (1996). 家庭内労働の分担における衡平性の知覚 家族心理学研究, 10, 15-30.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.

- 尾形和男・宮下一博（2003）．母親の養育高度に及ぼす要因の検討—父親の協力的関わりに基づく夫婦関係、母親のストレスを中心にして— 千葉大学教育学部研究紀要, 51, 5－15.
- 岡本祐子（1996）．育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 日本家政学会誌, 47, 849－860.
- 佐藤小織（2012）．初産婦の夫婦関係の評価と育児満足感を構成する諸要因の関係に関する研究—育児初期の核家族に焦点を当てて— 日本助産学会誌, 26, 222－231.
- 住田正樹（1999）．母親の育児不安と夫婦関係 子ども社会研究, 2, 19－98.
- 山口雅司（2010）．母親になるということ—母親アイデンティティをめぐる考察（相山女学園大学研究叢書）あいり出版.
- 山下倫実・加藤陽子・石田有理（2016）．育児ストレスが母親アイデンティティに及ぼす影響に関する予備的検討—父親の育児行動に対する評価に着目して— 十文字学園女子大学紀要, 47, 25－36.
- 吉田恵三・岡本祐子（2011）．養育者が持つ育児感情道と対処行動の関連 広島大学大学院臨床教育センター紀要, 10, 125－134.

付記

- 1）本研究は、十文字学園女子大学プロジェクト研究費の助成を受けて実施されたものである。
- 2）本研究は、日本心理学会第87回（2023年）において発表された内容に加筆修正を行ったものである。